

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「え？」

わたしは思わず立ちどまった。

駅の踏み切りを渡り、坂道にさしかかろうとしたときだった。

声が聞こえた。

しかも、その声は、わたしの耳ではなく、心の中にこえました。

（金色の夕暮れ……涙が出そうになるのはどうして……ひとりぼっちだ……だれもわかってくれない……だれも考えてなんかくれない……）

羽尾台の駅から商店街に続く道はゆるやかな登り坂で、少し背をかめると、道の向こうに空がそのまま続いているように見える。夕焼けの空が金色に燃えている。わたしは自転車を押して、その空の色に見とれながら歩いてた。

そのとき、わたしの心に、いきなり「声」が飛びこんできたのだ。

少年の声。淋しく、つらそうに訴えかけている。それも、かなり近くに。

あたりを見わたしてみる。

夕暮れの羽尾台商店街には、勤め帰りのサラリーマンやOL、買い物主婦、塾通いの少年や少女、そして近く的美術大学や工業大学の学生たちがそぞろ歩いている。

だが、目についたどの人も、わたしに語りかけてきた「声」とはちがう。今の声は、十二、三歳ぐらいの少年のよう
に思えた。それらしい年かっこの少年は数人歩いている。

でも、どの子もちがう。

あの、友達同士でじゃれあつてる男の子だって、内心のつぶやきはどんなものだったもんじゃないけど、少なくとも今の声とはちがう。

……なんて、淋しそうな声だったんだろう。わたしの胸をぐさりと突きさすような悲しそうな声。まるで、悲鳴のようだった。

いるんだ。わたしのような「力」を持った、不幸な子が。

かわいそうに。きみも、きつと、吹きさらしの風の中を、はだかで歩いているのね。

わかるよ。それがどんなにつらいことか。

でも、見つからなければ仕方がない。

それに、たとえだれだかわかったところで、わたしにはどうしようもない。

自転車のペダルをこぎながら、わたしはさっきの声に向かって、そつとささやいた。

わかるよ、きみの気持ち。

そう。わたしも、いつもひとりぼっちだったから。

「この前の手紙、読んでくれた？（もうあれから三日だぜ）」

「……」

「それで？ 返事は？（⁴気が弱いから自分で言えないんだよな）」

わたしは黙って歩く。

「なあ、なんとか言ってくれよ（わざわざおれがこうして聞いているんだぜ）」

わたしの前に立ちはだかる。

「どいてください」

「どうしてだよ。ほかに、好きなやつ、いるのか（いるわけないよな。おまえ、暗いもんな）」

「通してよ。そんなことどうでもいいでしょ」

「おれのこと、嫌い？（そんなはずないだろ。つきあつてやろうって言ってるんだぜ。ほんとに脇田のほうがいいんだぜさ。でも脇田じゃちょっとな）」

仕方なく立ちどまる。

「だれかさんにはふられそうな気がするから、わたしにしとこうか、なんて思つて申しこまれても、つきあう気はないの。あいにく」

ぎよつとしてる。わたしなら気が弱そうだから、断れないだろうって思つてたのにな。

「……だ、だれがそんなこと言つたんだ！（美和子のやつだな。あのおしゃべり）」

「別に。あなたの顔にそう書いてあるもの」

— 1 —

「冗談なしだぜ（こりやだめだな。ちえつ。どうしよう。まあいいや。だめならだめだ。だけど、何とかしなきゃな）でもさ。（このままじゃみじめだぜ。くやしい）一回くらい仲良くしたつていいだろ。（頼むよ、ひっかかつてくれ。おつ、考えてるぞ。そうこなくっちゃ）そうだ、こんどの日曜日、ひま？ あ、日曜日は塾か。いいんだ。ひまだつて言つたら、そこで一発、おれのほうでお断り、つて言つてやるんだ。生意気なやつめ。ほら、言えよ」

わたしは思わず笑つた。

「な、何がおかしいんだよ」

「だって、あなたはひまじゃないでしょ。」

⁶ こんどこそ、向こうはカウンター・パンチをくらつたような顔になる。

わたしはかれを置きざりにして歩く。

「不愉快なやつ！ こつちでお断りだよ！」

捨てぜりふが耳にひびく。ふりかえる気もしない。

⁷ やつと、正直に言つたのね。でも、不愉快なのはどつち。⁸ あなたが言葉にしなかったことを、わたしは全部聞かされているのに。

いつからなのか、もうワスレてしまつた。

テストはどこが出るか、ほとんど当てることができる。授業中の先生の心のつぶやきを聞けばカンタンだった。だからと言つて、成績が抜群だつてわけじゃない。テストの範囲がわかることと、それを理解し、記憶し、答えを書くことは別だから。ただ、他人よりは努力せずに、ある程度の成績はとれた。そのことで、カンニングしたのではと疑われたこともある。実際、カンニングに近いことは自然にやつていたと思う。テスト中に、だれかの、問題を解くつぶやきが聞こえてくるから。

口に出せないようなことを露骨に聞かされる。それだけならまだしも、そんな露骨なつぶやきを、すました挨拶や、さわやかな笑顔というオブラートにくるんで、なごやかに話している場面に出会ふと吐き気さえた。

そんなときも、わたしは、ただ黙っている。

クラスメートからは、陰気な子だと思われている。わたしからは話しかけない。⁹ いつもひっそりしている。だれから話しかけられても、口数は少ない。そうしているほうがブナンだから。目立たないように生きる。できれば、だれの心にも、わたしの存在が浮かばないように。

だれかが何かで目立つということは、それだけ多くの人がその人について考え、その人にまつわるいろんな想いが渦巻くことなのだ。

その「想い」の渦のものをすごさをわたしはよく知っている。だれかがはめられると、みんなの心の中ではその子への悪口が嵐のように吹きあれている。

ある時期、わたしはそれらのことにいちいち怒り、悩んだ。学校を嫌い、家族を嫌つた。それから、次第に他人のことと怒つたり悩んだりすることをやめた。

他人はどうでもいい。それよりも、自分を守るほうがだいじ。決して矢面に立たないこと。立てば、自分が傷つく。人の心の声を知れば知るだけ、わたしはどんどん臆病になつていった。

ある出来事が起きるたび、その事件の中心であるだれかが、みんなの話題、いや、みんなの心の話題になる。あんなふうに関われるくらいなら死んだほうがましだと思つたことが何度あつたことか。

だけど、どんなにひどいことを他人に思われても、当の本人たちはだれも死にはしなかった。

でも、わたしはそうはいかない。わたしは、みんなの心の声が聞こえてしまうのだ。そして、わたしは強くない。たとえ矢面に立たなくても、ちらりと聞こえる自分への声、わたしへの評価のひとつひとつに、ぐさりぐさりと傷つけられる、情けない人間だつた。内気、陰気、暗い目。その程度の評判なら耐えられる。思われて当然のことだつてたしかにあるから耐えるしかない。わたしだつて同じようなことを思つたりもするから。それでも、耐えられないことがある。わたしが何の悪意も持っていない人から、いきなり「こいつ、やなやつ！」と罵声を浴びせかけられたときの気持ちは、だれにもわかるまい。

にもかかわらず、この「力」が便利だったことも事実。そうなのだ。ひっそりと生きていくには、やはりこの「力」は欠かせないものでもあつた。みんながわたしのことをどう考えているかを知るために、「力」を使わねばならなかった。

「力」によつて傷つき、「力」によつて自分を守る……つまり、わたしは自分で自分をどうしようもないところに追いこんでいた。

— 2 —

問1 ―線①「ワス（れて）」、②「カンタン」、③「ブナン」のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 ―線(1)「そぞろ」、(2)「オブラートにくるんで」の意味としてもっともふさわしいものを、それぞれ次のア、オから選び、記号で答えなさい。

(1) 「そぞろ」

ア あてもなくぶらぶら

イ めいめいばらばらに

エ まわりを気にしないで

オ 一つの方向にきちんと

ウ たくさんの人が並んで

(2) 「オブラートにくるんで」

ア 皮肉をたつぷりこめて

イ 表面をつくろって

ウ 落ち着きをとりもどして

エ 友情を示そうとして

問3 この文章を三つに分けるとするとどこで区切るのが適当か。第二、第三段落のそれぞれ最初の五字をぬき出して答えなさい（句読点等の記号も一字とする）。

問4 ―線1「わたしのような【力】とはどんな力か。解答欄の【力】に続く形で十字以上十五字以内で答えなさい（句読点等の記号も一字とする）。

問5 ―線2「吹きさらしの風の中を、はだかで歩いている」とはこの場合どのような意味か。もっともふさわしいものを次のア、オから選び、記号で答えなさい。

ア 孤立した状態をさけようとしている

イ きびしい自然と必死に戦っている

ウ 人の想いによって傷つけられている

エ 深い愛情がなかなか伝わらない

問6 ―線3「さっきの声」は具体的にどこに書かれているか。文中からぬき出し、その最初の五字を答えなさい（句読点等の記号も一字とする）。

問7 ―線4「気が弱いから自分で言えないんだよな」とはどういう意味か。もっともふさわしいものを次のア、オから選び、記号で答えなさい。

ア おれは気が弱いから手紙で気持ちを打ち明けたんだ

イ こいつは気が弱いので自分から返事ができないんだよな

ウ おれは気が弱いので美和子に頼んで気持ちを伝えたいんだ

エ おれは気が弱いのでとうとう返事を聞いてしまった

オ こいつは気が弱いから返事をもらうのはあきらめた

問8 ―線5「そんなこと」とはどんなことか。もっともふさわしいものを次のア、オから選び、記号で答えなさい。

ア わたしより脇田のほうが断然いとおどろきに言いふらしていたこと

イ 脇田にはふられそうだが、わたしとならうまいくと美和子に言われたこと

ウ 脇田のほうがいいが、わたしならつきあってくれそうだと思っていたこと

エ 今つきあっている脇田とは結局うまいくなくなるだろうと考えていたこと

オ つかはきつとわたしにふられてしまいそうな気がすると感じていたこと

問9 **A** に入る語を文中から五字でぬき出しなさい。

問10 ―線6「こんどこそ、向こうはカウンター・パンチをくらった」とあるが、最初の「パンチ」に相当する言葉はどこに書かれているか、その箇所の最初の五字をぬき出して答えなさい（句読点等の記号も一字とする）。

問11 ―線7「やっと、正直に言った」とはどういうことか。もっともふさわしいものを次のア、オから選び、記号で答えなさい。

ア はじめから嫌なやつだと思っていた

イ 不快な気持ちを大げさに表した

エ 思ったことをそのまま言葉にした

オ 正直であることの大切さを知った

問12 ―線8「あなたが言葉にしなかったこと」とあるが、会話に含まれている「あなたが言葉にしなかったこと」の中に（ ）をはずしてある部分がある。その部分の最初と最後のそれぞれ三字をぬき出しなさい（句読点等の記号も一字とする）。

問13 ―線9「いつもひっそりしている」のはなぜか。その理由としてもっともふさわしいものを次のア、オから選び、記号で答えなさい。

ア ひっそりしていると他人の気持ちを十分に知ることができるから

イ 注目されると他人から直接悪口を言われてしまうことになるから

ウ 矢面に立つと自分も他人も心を痛めつけられることになるから

エ 目立つことで自分の悪口を聞くことになってしまうから

オ 人前に出て活動するには性格が暗くて臆病すぎるから

問14 **B** に入るのものにもっともふさわしいことを次のア、オから選び、記号で答えなさい。

ア こっそりと

イ わざと聞こえるように

ウ 面と向かって

エ 心を開いて

オ 心の中で

問15 この文章の――線6より後の部分には次の一文がぬけているが、どこに入ればよいか。この文が入る直前の部分の五字をぬき出して答えなさい（句読点等の記号も一字とする）。

それは心の中だけの話題だったから。

二 二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「平気ですをつくひと」というような題の本が話題になったことがあった。「うそ」はいつの世でも「悪」であり「ワルいこと」になっている。イソップの「狼少年の話」と言えば、「嘘をつく少年の話」という答えが直ちに返ってくる。「狼が来た」といって、村人を驚かしていた少年が、実際に狼が来たときに「狼が来た」と言っても信じてもらえなかったという話である。ギリシアの時代から、「うそをつく」ことが「悪いこと」として戒められていたということか。でも、では「ウソ」とは何か、ということになると、うまい説明がなかなかできないことがわかる。

私の好きなことわざに「口と腹」というのがある。口先で言っていることと、腹の中で思っていることが違うという意味のことわざである。二つの相反することを同時に言ったり、したりする、という情景をうまく教えてくれる「考え方」は少ない。あつたとしても、たいていそういう場面は「悪いこと」のたとえとして使われる。たとえばこんなふうな。口二つでものを言う（二つのことを二様に言う。あつちと、こつちで違うことを言う）

二枚 **A** を使う（前後矛盾したことを言う。うそをつく）

二足の **B** を履く（両立しないような二種の職業を兼ねること）

二股かける（同時に二つの目的を上げようとする）

二兎を追うものは一兎もえず（**C**）

ここでイメージされているのは、要するに「二つの顔を持つ」ということである。Aという顔を持つものが同時にBという顔も持つ。そういうことは不審がられ、忌み嫌われるということだ。ここに「悪」と呼ばれてきたものの基本形がある。「うそをつく」ということが問題になるのもこういう状況のなかでだ。

この「悪」の基本形である「二つの顔を持つ」というあり方が、もっと「邪悪」になると「怪人二十面相」というようになってゆく。このように、「二つの顔」を持ち、「二心」を持ち、「二枚の **A**」を持つことは、本来は許されないこととしてイメージされる。しかし、人は成長するなかである年代になると、自分が「二つの顔」を持っているのではないかということに気がつきはじめる。それが十歳頃だ。この頃に「口と腹」の違うことがあり得ることに気がつき出す。中学一年で亡くなった岡真史君のノートにはこう書かれていた。

人間／人間ってみんな百面相だ（『ぼくは12歳』）

新美南吉に「嘘」（牛をつないだ樗の木）という短編がある。主人公の久助（小学五年生）のクラスに、ある日ハイカラな言葉をしゃべる転校生（太郎左衛門という長い名前なのだが、最初みんなには「太郎」だと嘘をついている）がやってくる。その少年は何かにつけ珍しい話をする。はじめみんなはこの転校生の語る見てきたような話をキョウミ深く聞いていたが、しだいにそれが「うそ」であることがわかってくる。そしてみんなが彼のことを「相手」にしなくなる。そんなある日、久助は、窓の外を見ているこの転校生の横顔を見ながらふとこんなことを思うのである。

教室の窓にもたれてはんやりしている嘘つきの太郎左衛門の顔を、彼に気づかれぬようまじまじとながめていた。そして、さらにきみようなことを発見したのである。それは太郎左衛門の目は、左右、大きさがちがうということである。右の眼は大きい。左は小さい。そしてその上おかしなことに、大きい目は、美しいなごやかな、てんしんらんまんな心をのぞかせているのに、小さい目は、陰険でひねくれていて、狡猾なまたたきをするのである。

こいつは変だと、久助君がいっしょうけんめい見ていると、さらに、耳も左右大きさと形がちがいが、鼻でさえも、左の小鼻と右の小鼻はちがっているの、すこしゆがんでみえることがわかった。久助君は考えた。――太郎左衛門はひとりの人間じゃなくて、ふたりの人間が半分ずつよりあつてできているのじゃあるまいか。

ここに「二つの顔」を意識しはじめている小学五年生がいる。そしてそうした「二つの顔」が「うそをつく」ことの問題として意識されている。新美南吉はこういう「うそ」が問題になる場面をくり返して作品化している。『屁』というユニークな作品も「うそ」にまつわる話である。教室で句う「屁」は、いつも身なりをきたなくしている「石太郎」のしたものとしてやし立てられていた。ところが、ある日主人公の春吉が誤って放った屁が、当然のごとく石太郎のせいにされてゆくのを知ることになる。そして今までみんなもこうやって「うそ」をついてきたのだということを知る

ことになり、こう思うのである。

そういうふうには、みんな狡猾そうに見える顔をながめてみると、なぜか春吉君は、それらの少年の顔が、その父親たちの狡猾な顔に見えてくる。おとなたちが、せちがらい世の中で、表面はすずしい顔をしながら、きたないことを平気でして生きていくのは、この少年たちが、ぬれぎぬをものいわぬ石太郎にさせて知らん顔しているのと、なにか、にかよっている。だが、それは強くない、心のどこかで、こういう種類のことが、人の生きていくためには、肯定されるのだと、春吉君には思えるのであった。

「嘘」も「屁」もともに小学五年生の出来事として描かれている。この頃に、自分たちがうそをつき **D** 存在であることに気がつき出す。そしてそういうことを心のどこかで「肯定」する自分にも気づいていくのである。それはおそらく自然なりゆきだ。ここに「成長」するために体験しなければならない大事な心の処理の仕方がある。この同じ年代の頃のエピソードにこんな話がある。

ある事件で逮捕された中学生の同級生がテレビで語っていた。小学校の修学旅行のときに、土産物屋の店先で試食をしていたとき、彼が「**E**」と言ったので、こんなところでは、うそでもいいから「**F**」って言っとくのよ」と注意したら「うそをつくのは絶対にいけないってお母さんに言われてるから」と彼が言ったというのである。そんなエピソードを覚えていくくらいだから、そのときの少年の受け答えは友だちにどこか妙な不自然な感じを与えていたのだろう。本当であれば、彼の言ったことはちつともおかしいことではない。「1」まっとうなことを言ったはずなのに、まわりの友だちに「変な感じ」を与えてしまっていた。これはどういうことだったのだろうか。

「うそをついてはいけない」などということは誰でも知っている。幼稚園児でもそんなことくらい知っている。よく知ってはいるけれど、しかしこのことは本当には実践することの不可能な真理なのだ。「お部屋のそうじちゃんとしたの？宿題ちゃんとしたの？」と聞かれて「ちゃんとしたよ」と答えたら、そうじや宿題を「本当に」隅から隅までちゃんとしたことになる。しかし母親が点検してみたら、そうじや宿題に「ちゃんとできていない」ところがあった。そうすると母親はこう言うのである。「うそをつくんじゃないよ」と。

しかし成長するある年代に入ると、私たちは心で思うことと、それを現実に行うことは「同一」にはゆかないことがわかってくる。口で言っていることと行動できることの間にはいつもずれがあるし、Aをするとと言っても、いつもAができるとは限らない。Aをすると行ってBしかできないことなどはいっぱいある。それでもBしかできなくてもそれはAをしたと見なすことなどいっぱいある。そしてそれをあえて「**G**」と言わないことがある。そういう現実の仕組みがわかってくる年代がある。

そういう仕組みを「AでありながらBでもある」というふうに言うとしたら、たとえばBであってもそれはAでもあるんだよ（たとえばちゃんと部屋の掃除ができなくても、したことにしてあげる）と認めてあげることにもなる。しかしこの「AでありながらBでもある」ということを認めてあげないとしたら、「2」AはBであつたりCであつたりすることが許されず、どこまでもAであり続けなければならないとしたら、Aという不可能なことをキョウセイされ続けることになる。そうすると、そんな実現できそうにもない自分を、「3」できるかのように演出しなければならなくなり、結果的にはもっと大きなうそをつく自分を創り出してゆくはめになるのである。

（村瀬学「なぜ大人になれないのか」より）

問1 ――線①「直ちに」、②「仕え」の読みかたをひらがなで答え、③「キョウミ」、④「キョウセイ」のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 ――線（Ⅰ）～（Ⅲ）の意味としてもっともふさわしいものを、それぞれ次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- （Ⅰ）「まじまじと」
- ア ひそかに イ しきりに ウ ちらつと エ たまに オ じつくりと
- （Ⅱ）「てんしらんまん」
- ア 非常にうれしく、楽しい気持ちが続いていること
- イ 細かいことを気にせずいつも楽しくのん気に過ごすこと
- ウ かざつたり気どつたりせず、ありのままであること
- エ 正しいことしか許さないまっとうな気持ちが強いこと
- オ 誰とも仲良く接することができる器用さがあること
- （Ⅲ）「ぬれぎぬ」
- ア 周りからの非難 イ 他人へのやつあたり ウ 失敗の責任
- エ 身に覚えのない罪 オ 弱い者いじめ

問3 「1」～「3」に当てはまることばとしてもっともふさわしいものを、それぞれ次のア～クから選び、記号で答えなさい。ただし同じ記号は一度しか用いてはならない。

- ア しかし イ とうてい ウ ところで エ そして
- オ あたかも カ むしろ キ けつして ク つまり

問4 **A**・**B** にそれぞれ当てはまることばを答えなさい。 **A** は漢字、**B** はひらがなで書くこと。

問5 **C** には、上のことわざの意味が入る。もっともふさわしいものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 同時に二つのことをしようとする者は、一つの成功しか得られないこと

イ 同時に二つの効果をあげようと思いがちでも、努力しないこと

ウ 同時に二つのことをしようとする者は、どちらの成功も得られないこと

エ 同時に二つのことをしようとしても、誰からもほめてもらえないこと

オ 同時に二つの効果をあげようと思いがちでも、一つのことしかしないこと

問6 次の文はどの文の前に入るか。この文の、後に続く文の最初の五字を抜き出しなさい（句読点も一字とする）。

じぶんもそのひとりだと反省して、自己嫌悪の情がわく。

問7 ――線1「悪と呼ばれてきたものの基本形」とは、どのような状態を意味するか。新美南吉の「嘘」という作品の引用部分から、二十字以上二十五字以内で抜き出し、解答欄の「状態」に続く形で答えなさい。

問8 ――線2「新美南吉」は「ごんぎつね」「手袋を買いに」などの童話を書いた作家として有名である。同じように童話作家として活躍した宮沢賢治の作品を、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 走れメロス イ トロッコ ウ 吾が輩は猫である エ 友情 オ 風の又三郎

問9 **D** に当てはまることばを文中から七字で抜き出して答えなさい。

問10 **E**・**F** には対になることばが入る。それぞれ五字以内で答えなさい。

問11 ――線3「ちつともおかしいことではない」とあるが、筆者がこのように考える根拠としてもっともふさわしいものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 孝行 イ 親切 ウ 友情 エ 誤解 オ 正直

問12 **G** に当てはまる表現として、もっともふさわしいものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア うそをついていない イ うそは必要だ ウ うそは許されない
- エ うそは悪ではない オ うそをついた

問13 ――線4「AでありながらBでもある」という表現を、本文の内容をふまえて、「菌みがききをする」という例を用いて言うとしたらどうなるか。もっともふさわしいものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア □では「菌みがききやんとしたよ」と言うが、実際は菌みがききやんとできている。
- イ □では「菌みがききやんとしたよ」と言うが、実際は菌みがきをやろうという気など全くない。
- ウ □では「菌みがききやんとしたよ」と言うが、実際はこれから菌みがきをしようとしている。
- エ □では「菌みがききやんとしたよ」と言うが、実際は菌みがきききちんとはできていない。
- オ □では「菌みがききやんとしたよ」と言うが、実際はめんどくさいからしていない。

問14 この文章の内容的な流れを説明してみた。もっともふさわしいものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア まず、うそとは何かということとわざと小説の例を挙げながら説明する。そして人間は、ある年代になると、言ったことと実行したこととの間のずれについて否定的にとらえるようになると述べている。

イ まず、うそをつくことが「悪」であると述べ、人間がさまざまな顔を持つということと小説から例を挙げながら説明する。そして人間は、うそをついてはいけないということを、強調して述べている。

ウ まず、うそをつくことは歴史的な観点からみても「悪」であり、ことわざや小説にもうそに関する内容のものが多くあることを説明する。そして、小さなうそは必ず大きなうそを生み出す原因になると述べている。

エ まず、うそとは何かという問題提起をし、ことわざの例をいくつも挙げて、うそは「悪」であるという前提を導いている。その上で成長するにつれてうそをつくことを肯定してゆく人間のあり方について述べている。

オ まず、嘘は本来、許されないこと、「悪」であると断定し、うそをつくことで周りから相手にされなくなった人間について説明している。そしておとなたちがうそをつくのが上手になっていくことについて述べている。